

知られざるトルコを紹介する
「ギョネイドウに行く」トルコ南東地方特集に続いて、
BBEがお届けするトルコ・東アナトリア地方探訪記

連載特集／トルコ北東地方・クゼイドウシリーズ 最終回

トルコ奥の細道

《最終回》

「カルスと

東部国境の遺跡アニに迫る」

写真・文／赤松順太

西部・中部の華やかな観光地とはひと味違った、「通」を引きつける奥座敷がクゼイドウ（北東地域）。

黒海の湿った風に育まれた森林、三千メートル級の峰々に発する奔流、清流、カフカスの異文明がもたらした栄光の残照、固有の文化を守って生きる人たちのひっそりとした息遣い。

そうしたものを尋ねて旅を重ねた夫婦の記録と記憶が、三回シリーズとして展開される。

今しばし豪華と絢爛を忘れて、歴史のひだに分け入ってみよう、そこにきつともう一つのトルコが見つかるはずだ。

好評連載「トルコ北東地方・クゼイドウシリーズ」最終回



アニ遺跡。左はセルジューク・トルコ時代のモスク、中央は10世紀のカテドラル、右は13世紀の聖グレゴリー教会。

カルスへの道

「カルス」・・・この名前は、その響きの軽さとは裏腹に、ずしりと重さを感じさせます。それはこの町の帰属をめぐって、数々の国際的な争い、駆け引き繰り広げられたからです。私はこの町を都合三回訪ねましたが、いつもいわく言いがたい格別の感慨を禁じ得ません。

現役生活の最初の頃、ですからもう二〇年近く前のことですが、イスタンブールのドルマバフチエ宮殿の護衛に立っていたハンサムな兵士は、出身地を聞いた私に「カルス」と答えました。その一年後でしたか、エーゲ海岸のアイヴァルクの海岸で会った青年は、近日赴く兵役先を問わず語りに私に告げたのです。「カルス」。

現在はどうか詳らかではありませんが、兵役は通常、出身地からできるだけ離れた土地で勤めなければならないと聞いていました。もちろん私はその頃、カルスの所在は地図でしか知りませんでしたがついなるほどと頷かされたものです。さて今ではカルスへも空の便が出来、私も最近の九六年には、アンカラから飛びました。でも最初の八八年には、バスでエルズルムからホラサンを経由して入りました。そして次の九五年には、アルト